

タイトル	東洋における修辞学の変遷 : 日中の修辞学の比較を兼ねて
著者	テレングト, アイトル; TERENGUTO, Aitoru
引用	北海学園大学人文論集(54): 61-82
発行日	2013-03-31

東洋における修辞学の変遷

— 日中の修辞学の比較を兼ねて

The Reception of Rhetoric from the West via Japan to China:
What is the Essence of the Rhetoric and its purpose in the Orient?

テレングト・アイトル

Abstract

Though once a fundamental part of education in the Humanities, Rhetoric declined in the Western world in the 19th century. Western Rhetoric was adopted by Japan in the late 19th century and soon reached its greatest level, but it rapidly vanished from society during the 1920s. During this time, the Chinese adopted Rhetoric from Japan, and by the 1930s it had evolved into a uniquely Chinese style. With the exception of two periods of great internal upheaval, Chinese Rhetoric appears to have succeeded in higher education, as well as in the modern Chinese language more generally. Rhetoric has helped the Chinese language to progress, modernize and become standardized. In this paper, I will re-examine and discuss this phenomenon and argue that, in general, ancient Greek Rhetoric had standardized European languages in the Middle Ages and after the Renaissance. However, why has this powerful tool disappeared in today's Japanese language? Roughly 2,400 years after its inception in ancient Greece, and then transmitted through Japan, Rhetoric has become an important tool in many Chinese universities and in efforts at expanding the influence of modern Chinese. The entire process forces us to consider when and in what situations today's people need the skills offered by Rhetoric.

要 旨

西歐人文学システムにおいて不可欠な基礎的学科である修辞学は、19世紀徐々に歴史表舞台から退けたが、19世紀後半から日本はそれを受容し、20世紀初頭までの短期間に、哲学、美学、詩学、文学評論、心理学、論理学、言語学、文章学、文体、文法などを網羅するような高度な成熟した修辞学を発展させたのである。しかし20世紀20年代後半から急速に衰微してしまった。その代わり、中国は日本から修辞学を学び、30年代には独自の修辞学を展開するようになる。その後の戦争と政治的な混乱を除き、中国修辞学は言語教育において継続して実践され、中国語の近代化と標準化をサポートし、とくに1980年代には著しい発展をとげ、大学などでも広く展開するようになる。少なくとも現在、中国のメディア、外交においても、欧米との弁論の場面において修辞学的な技法が駆使されたりするのは決して珍しくない。

本稿はそういった日中修辞学を受容のプロセスを検証する。したがって、かつて古代ギリシャ修辞学がローマ、中世、ルネサンスを通じて時代ごとに西欧諸言語の規範化と標準化などの役割を果たしてきたものの、その役割と機能はなぜ日本の人文学、あるいは日本語の近代化において継続してフィットして来なかったのか。またその代わり、どうして中国に受容され、今や急速に発展をみせ、少なくともグローバリゼーションのなか、現代中国語の規範化、標準化とともに、「孔子学院」のような語学スクールでコミュニケーション理論を担って進められているのか。それらの諸相を踏まえ、そういった修辞学の展開を検証して、改めて次のような問いかけをしたい。つまり、修辞学とはどんな人が、どんな伝統に、またどんな時代に、どういう状況において必要とされるのか。それは一過性の教育装置化か、それとも常に教育において施さなければならぬ基礎教育科目なのか。言語が一旦現代化の洗礼を受け、現代社会において成熟したコミュニケーションの道具になったら、修辞学はまだ必要なのか。修辞学はコスモポリタンになるための必須とされる言語技法、あるいは教養なのか。修辞学はという

状況においてナショナリズムに利用されるのか。真理の探究には修辞学という言語技術が必要なのか、というように。

论文概要

19 世纪末欧美 Rhetoric 辩论术，或称雄辩术、修辞学渐渐趋于衰退时，日本正处于明治开国，开始系统地吸收欧美的人文学。日本在接受西方人文学时，逐渐认识到修辞学在欧洲两千多年人文学的基础教育中发挥着非常重要的作用（西周 1870 年）。继而着手翻译英国的简易百科全书《大众知识》，介绍“修辞学与美辞”条目（1880 年）。该条目不仅包括修辞学，还包括文章分类、写作、诗歌评论以及文学欣赏。这一翻译介绍的开端，它已经意味着日本开始吸收修辞学不仅兼并了启蒙性、通俗性和综合性，还要包容文学创作、文学欣赏和文学评论。然而，明治初期日本如何翻译 Rhetoric 还未有统一的术语。如“议论学”“论理”“论理术”“文章学”“善论术”“口才”“华文学”“善论之理”“讲说法”“修文法”“辩论”“演术法”等，没有一个完整的定义。1889 年《美辞学》的诞生，进一步扩展了修辞学的范畴，并且它决定了日本修辞学的发展方向。文学理论家坪内逍遥说，“修辞学、美辞学范围非常广，它的下端连接国语学、论述法、逻辑学，上端包含美学”。即修辞学不仅要包含日本基础语文的各个学科、领域，还要包括美学。日本引进欧美修辞学，经过 30 多年的不断的发展，1909 年巨著《新文章讲话》（五十嵐力）终于出版。它综合东西方修辞，集中日文章传统，使日本的修辞学发展走向巅峰。但是，这一集古今文章评论，融东西方修辞学理论的大作，却反而意味着 20 年代末期，日本修辞学开始将走向衰退。然而，中国 20 年代开始学习、吸收日本修辞学，30 年代开始逐步探索出了自己的发展道路。如今，修辞学在中国，它是现代汉语的一门学科，在大学里是一门正规课程。向世界推广现代汉语的孔子学院的教学活动中，修辞学也发挥着重要的辅助作用。2400 多年的西方修辞学传统中，中国现代修辞学虽然是后生后学，却独辟蹊径，在汉语的现代化过程中发挥着重要作用。尤其在 21 世纪，现代汉语修辞学步入了国际舞台，开始倡导东西方修辞学的对话。本

文欲探讨修辞学在日本如何走向衰退，在中国为何得到发展，考察它的变迁，探索修辞学本身荣枯盛衰的规律，由此进一步设问，什么传统背景下，什么人什么时代需要修辞学？它是一次性启蒙教育学科？还是常设性基础教育？语言一旦经过现代化的洗礼，构成了成熟的交际工具时，是否还需要修辞学？要想当世界市民，建构大同世界是否必须具备修辞学语言技巧、修养？修辞学在什么状态下会堕落为功利性道具被国家主义、民族主义所利用？追求真理是否仍需要修辞学？

一、

西欧についての知識は一三世紀、すでに漢字圏に散見するようになったが、実際、その知識が体系として本格的に東洋に入ってきたのは、周知のように一九世紀後半になってからのことである。とりわけ西欧の学問体系は、主としてまず明治日本に受容され、それから中国に入るようになったのである。

そういった西学東漸のなか、古代ギリシャを源泉に、アリストテレスらによって整えられたレトリック（修辞学・弁論術）が西欧人文学の体系のなかで欠かすことのできない重要な基礎的な部分だという認識は、明治初期どこまで確実だったのか明確ではないが、最初にそれを意識して翻訳して紹介したのは、明治二年、一八七〇～七二年ごろ、西周の『百学連環』、『美妙学説』によるものであった。しかし西周（1829-1897）は「Rhetoric」を「文辞学」と訳出したように、明治初期「修辞学」については、表記・意味・意識・直訳、いずれにおいても統一されたものはなかった。例えば「レトウリカ」「レトーリカ」「レトリッキ」、「議論学」「論理」「論理術」「文論学」「善論述」「口才」「華文学」「善論之理」「修辞学」「講説法」「修文法」「弁論」「演術法」などのように、多様にわたって訳出され、それが正確に理解され、把握されるようになるにはさらに時間が必要であった。というのも明治初期、漢文・和漢混淆文、文語文や、後の雅文・俗文・雅俗折衷文など、いずれも欧米の文献を翻訳するには困難さを伴っていたからだけ

ではなく、読者もそれを正確に読み解くのがスムーズではなかった。しかも日本語文法の編成と日本語それ自体の文章体と口語体との一致、いわば「言文一致」の言語改革という言語の近代化に差し迫られていたのである。欧米の知のシステムの受容には、まず山積した言語の問題がわだかまっていたのである。日本だけではなく、中国にとってもっと深刻であった¹。

そういう西欧受容という喫緊の時代の要請により、早くも江戸末から言語改革が主張され、明治時代にわたってその機運が高まる。政府と民間によってさまざまな提案が出され、改革が施行される。例えば「漢字御廃止之議」(1866)、「修国語論」(1872)、「日本語廃止・英語採用論」(1872)、「文法会」の設立(1877)、「かなのとも」の設立(1882)、「羅馬字会」の設立(1884)、「言文一致」(1886)の運動、「簡易日本語文法(現代書き言葉)」(1886)²の成立、「口語日本語ハンドブック」(1888)の出版³などのように、国字・国語・国文に対してさまざまな改革が施されるようになる。

それにともなって、欧米修辞学の導入においては、一八七七年以降、尾崎行雄(1858-1954)の『公会演説法』(1877)、菊地大麓(1855-1917)の『修辞及華文』(1880)、黒岩大(1868-1920)の『雄弁美辞法』(1883)などが刊行される。そのなか『公会演説法』と『雄弁美辞法』はいずれも修辞学の演説の方法・説得力について紹介し、古典「弁論術」のフレームワークに属するものだと言える。『修辞及華文』のほうは、イギリスのチェンバーズ兄弟⁴によって編集された二巻本の『Information for the People』(万人の知識)に収録された「RHETORIC AND BELLES-LETTERS」⁵という項目の訳出であった。その原文は修辞学、文体論、文章作法、作品ジャンルと詩学などを総合的に一括して紹介し、その意図は一般知識を民衆に普及し、啓蒙するためのものなので、あくまでもコンサイスな百科事典の範囲にとどまったものである。明治期の知識の普及と啓蒙の時代の要請か、百科事典の『修辞及華文』はその時代に適合していたようで、その結果、最初の影響力のあるレトリックは総合的なものであった。これを皮切りに、アリストテレスの『詩学』と『弁論術』という二つの違う分野が混合されて受容され、認知されたような傾向がある。現在のジャンル分けから言え

ば、詩学・文学理論・文学批評を修辞学として扱い、それを同一ジャンルとして、訳述し、受容するようになったのである（実際、一五世紀末、一時期西欧においても『詩学』が文体・文章作法を扱うレトリックに属してみなされたこともある）。

そして一八八九年、高田早苗（1860-1938）の『美辞学』が刊行される。漢字圏において最初に試みたものだけに、「西洋のレトリックを基にして、日本人が書き（試作し）たレトリックの最初の優れた書」⁶だと高く評価されたが、しかし、この『美辞学』は、書名からもわかるように、それは修辞学のみならず、美学をも含め、詩学ないし文学批評、鑑賞を網羅したものであった。すなわち、美学と詩学をフレームワークにして、文章作法、文体、作品の創作・鑑賞・批評までの諸方法か指針を示したようなものであった。その目的について高田は、「著作談論批評を能くするを教ふる学問」で、「古来不朽不滅の文と称せらるるものを取り、細嚼玩味仔細に之を分析したらんには必ず之をして不朽不滅の文たらしむる所以の元素の其内に存在するを見るならん。美辞学の目的たるや、この諸元素を蒐集して之に説明を加へ、談論著作批評に従事する人々をして其方針を知らしめ其参考に資せしむるに在るなり」と、「緒言」において言明したのである。しかしそれにもかかわらず、当時、修辞学として扱われ、例えば、同じ早稻田系の友人の坪内逍遙（1859-1935）が「美辞論稿」⁸において「修辞学」として認知しており、のちの武島又次郎（1872-1967）も『修辞学』（1898）の「緒言」において「我国の学問は之を西洋と比べて、皆釋容あるが中に、修辞学の如きは其甚しきものの一つ也。之を邦文もて著述したるもの、明治二十一年に成りたる高田早苗氏の美辞学のほか、今日に至るまで、一の注意に足るべきもの出たるを聞かず」⁹と、修辞学として高く評価している。以来、日本修辞学史において草分けの役割を果たしたのものとして位置づけられてきた。

かくして、既存の「文を属し詩を賦し歌を詠ずるを教ふるの書」、「文章詩歌を批評したる書」、「文話詩話」を語る書物の伝統のなか、「秩然たる一科の学問として以て談論著作批評を能くするを教ふる」総合的な分野が、

修辞学として確立されるようになるが、それは同時に、文学批評、詩学、美学と修辞学とのジャンルの混合が成立したということの意味していた。

一八九三年、坪内逍遙は「美辞論稿」の「緒言」において、その分野をさらに広めるように強調する。つまり「予が美辞論の区域は、いと広し。下は、国語学、論理法、論理学に密接し、上は、審美学に密接せり」と、文法から美学まで網羅し、むしろ詩学・美学の枠すら超えて、世に書かれた文章・作品一般までもに及ぶようになる。一方、逍遙は当時、東京専門学校で「修辞学」という講義(1890-1891)¹⁰をしていたが、その主要内容はアリストテレスの『詩学』そのものであった。つまり、逍遙にとっての修辞学とは、詩学と同一の分野で、アリストテレスの『Poetic』と『Rhetoric』は同一講義となっていた。いってみれば「美辞論」、「修辞学」、「詩学」というようなジャンル分けは、逍遙の文学論にとって問題にならなかった。東京専門学校の文学批評・創作の指導的な立場を徐々に確立した逍遙の見解は、のちの早稲田を中心とする日本修辞学の発展にとって、どれほどの影響を与えたか検証すべき課題だが、早稲田大学の修辞学が広範な分野ジャンルを含む包括的な領域として発展したのは逍遙の考えと密接な関係にあることは事実である。

東京専門学校を卒業した島村瀧太郎(抱月、1871-1918)は、そういった「美辞論」を継承して、一九〇二年の『新美辞学』(1902)を刊行する。これもまた「体系的にも美学・心理学・論理学・言語学・文学の諸原理を総合した、まさに『早稲田美辞学』の集大成を図ろうとした画期的な理論の書であった」¹¹。しかしそれもさらに拡張的なものとなり、「修辞法を兼ねるに創新なる哲学を以てしたる、例証の東西雅俗にわたりて富瞻なる」もので、修辞学を包含した一大総合書となったのである。つまり文法と修辞を兼ね、美学から哲学まで網羅して、古今東西の文章論を広く引用して、雅俗とも視野に入れた包括的な大著になった。しかしまさにその諸長所が欠点に転じたように、その拡張性と総合性は、修辞学の領域の境界を曖昧にさせ、その範囲の広がり逆にならざる煩雑さと多義性をもたらしたのである。それは欧米の修辞学のような伝統的なジャンルに基づいて他の分野に横断し

た、学際的な広がりでもなければ、中国古典の伝統に見られるような、さまざまな流派を総合した詩論や文章論でもなかった。まさしく早稲田大学を中心に、西欧の文法から哲学までの枠組を取り入れ、古今東西の各分野を横断して縦横に論じる独特な修辞学が形成されたと言える。

そしてさらに一九〇九年、近代日本修辞史上の集大成、五十嵐力(1874-1947)の『新文章講話』(1909)が刊行される。それはアリストテレスの『弁論術』、劉勰の『文心彫龍』と空海の『文鏡秘府論』というように和漢洋の修辞論の歴史を踏まえ、近代の森鷗外、二葉亭四迷、尾崎紅葉、国木田独歩、夏目漱石、島崎藤村などは言うまでもなく、様々な分野の人の文章用例を網羅して、修辞学と文章論を兼ねたもので、空前にして絶後した大著となる(680頁にもものぼる)。五十嵐はその「緒言」において、「今迄の作文書といふものには組織が無い、深さが無い、力が無い、熱がない、光が無い、新しみが無い、要するに命が無い」¹²と批判し、その「序言」において「要するに吾等の理想とすべきは立派な名文」¹³を求めたいという。それまでの美学・文学批評よりも、修辞学と文章作法に力点を置き、口語・標準語・文章の組立を強調し、文章の作法と学校教育には、最も適したものだといえる。その延長上には教育用の普及版も複数にわたって刊行しているが、実際、五十嵐自身も早稲田大学の教育現場で修辞学の講義を通じて実践をし、その修辞学の講座は形を変えながらも現在まで継続している。

しかし、一九二〇年代修辞学はさらなる普及が必要とするとき、泰斗になった五十嵐は逆に悲観的な言葉を漏らす。「実は私が文章の研究に関わり出してから十幾年、私の文章論に対する心は殆んど麻痺してしまいました。従って如何なる文章論も珍奇新鮮という感じを与えなくなり、同時に文章論を書くという事が私にとって非常に苦痛となってまいりました。でここでは甚だ勝手がましい仕方ではありますけれども、組織立った文章論はしばらく御免しを願って卑近な注意の一つ書き述べて見たいと思います」と。これは単なる個人の心境を語ったものだとはいえ、しかし、彼の心情と志向の転向は、日本修辞学の未来を予言したかのようなものであった(五十嵐力がどうして修辞学に対して悲観的になったか、それについて改めてそ

の個人の処遇とその伝記研究を通じて明らかにすべきことであるが)。

事実、日本の修辞学、文章の修辞法は 19 世紀末から 20 世紀の 20 年代まで急速に発展し、欧米の修辞学を導入したうえで、みごとに古今東西の修辞法を融合して、現代日本語の形成と文章の規範化を促したのである。大正初期まで輝かしい発展をみせ、一大の体系が作り上げられ、初等教育までに開花したのである。しかし、数多くの不朽の名に値する名著を産み出しながらも、その後、急速に衰微し、昭和になっても一向に復興の気配はなかった。現在、数少ない専門家を除き、現代日本語教育、言語学研究の領域においてほとんど言及することはない(修辞学がどうして日本において急激に衰微したかについて、別途に検討したい)。

二、

「修辞」という言葉は、中国の歴史において古代ギリシャの「Rhetoric」に匹敵するぐらい古い。その起源は、君子は文辞を修めるべきだという倫理的修身の意味合いで言及した孔子の言葉まで遡れる。『易経』には「君子は徳に進み業を修む。忠信は徳に進む所以なり。辞を修めその誠を立つるは、業に居る所以なり。」(君子進徳修業、忠信所以進徳也。修辞立其誠、所以居業也。)という。しかしそれはあくまでも「Rhetoric」という言葉を漢字に翻訳した場合に最も適したものだったのことであり、かつて修辞学が存在したということは言い難い。単に修辞という言葉によって文章・詩歌を評する文章論・詩論・詩評、あるいはその方法・技術について言及した修辞法を指すなら、その伝統は長い。しかし、それが直ちに欧米のいう修辞学「Rhetoric」に対応する体系的な分野、あるいは自立した領域として対比できるとは考え難い(「修辞学」という概念については別途に検討すべき課題であろう)。

実際、中国は体系的な現代修辞学を習得し、それをさらに現代中国語ないし古代中国語において体系的に成立させたのは、二十世紀初期のことであり、その体系化は日本の修辞学を受容してからのことである。

事実、西学東漸の初期段階で、日中両国において、伝統と現代、保守派と推進派、あるいは和洋・東西折衷といったような対立・折衷関係は、ほぼあらゆる分野に見られた現象だが、修辞学もその例外ではない。日本を通じて欧米の修辞学を受容することにおいて、中国も自然に「東洋派」、「西洋派」、「本土派」と「古今中外派」という四つの流派¹⁴に分かれていた。

そのなか「東洋派」とは最も早く日本の修辞学を導入した人々を指し、かつ影響力があった。その代表的な著作には湯振常の『修詞学教科書』(1905)、龍伯純の『文字発凡・修辞』、王易の『修辞学』と『修辞学通詮』、張弓の『中国修辞学』、陳介白の『新著修辞学』などがある。初めて中国に刊行された『修辞学教科書』は、武島又次郎の『修辞学』をモデルにし、児島献吉郎の『漢文典』、佐々政一の『修辞法』、島村抱月の『新美辞学』を参考にしたもので、龍伯純、王易、張弓、陳介白の著作は、いずれも島村抱月、武島又次郎と五十嵐力の理論か枠組を採用し、模倣したものである。

「西洋派」の修辞学の著作は比較的に遅れて世に表われる。代表的な著作のなか、唐鉞の『修辞格』(1923)は、主にイギリスの John Collinson Nesfield の『Senior Course of English Composition』(1889)¹⁵などを参考にして書かれたものである。さらに遅く宮廷璋の『修辞学举例・風格篇』(1933)があり、主として唐鉞の『修辞格』を参考にして、John Scott Clark の『A Practical Rhetoric: for Instruction in English Composition in Colleges and Intermediate School.』(1886)¹⁶と、John Franklin Genung の『The Working Principles of Rhetoric』(1901)¹⁷などを参考に構成している本である(ちなみに、「西洋派」の受容した以上の修辞学の文献は、いずれも日本の島村抱月、武島又次郎と五十嵐力などがそれぞれの実践と応用において参考した範囲内にある)。

「本土派」の最も影響力のあるものには、鄭奠の『中国修辞学研究法』(1920?)と楊樹達の『中国修辞法』(1933)がある。前者は北京大学のガリ版の教科書で、正式に発行されなかったものの、広く知られ、中国宋・明・清の伝統的な修辞法に基づいて編まれたもので、後者は自民族の伝統

を強調し、外来の修辞学を批判し、歴代の典籍から修辞法と修辞についての論説を集めて解釈し、点評したものである。

「古今中外派」といわれる学派の最も代表的な著作は、陳望道(1891-1977)の『修辞学発凡』(1932)である。この『修辞学発凡』の刊行は、現代中国修辞学の基礎となり、ほぼ現代までの修辞学の発展の大まかな方向性を指し示したと言える。もしこの『修辞学発凡』の誕生がなかったら、恐らくいまだに古今東西か、新旧論争の争いにとどまっていたのであろうと、中国の修辞学界は、彼の業績を一致して高く評価し、中国現代修辞学の開拓、創出と基礎の原点とされている。

陳望道は一九一五年日本に留学したが、最初は早稲田大学で修辞学を勉強し、のち東洋大学で学んで、中央大学で法学士の学位を取得して、一九一九年帰国する。早稲田大学の修辞学の講義を通じて日本美辞・修辞学の高田早苗、坪内逍遙、島村瀧太郎の著作に触れ、五十嵐力の講義の指導のもと、修辞学の基礎を叩き込まれた¹⁸。帰国後、最初は浙江第一師範学校で教え、一九二二年、早速上海大学¹⁹で修辞学の授業を開講するようになる。その教科書は『修辞学発凡』として最初に一九二三年ガリ版で印刷されたものだが、教育実践のなか10年余り模索して、それが正式に一九三二年に印刷されるまで五回にわたって大幅に修正され、かつ多くの知り合いの国語教員に教材として使われ、意見と訂正を求めた²⁰という。

いうまでもなく、この『修辞学発凡』の分類と枠組みは日本修辞学の影響を受けており、その理論、方法ないしタームまで取り入れている。中国修辞学史において、「消極修辞の要件や文章体裁・形式の諸篇など、多くのものは島村龍太郎の『新美辞学』と五十嵐力の『修辞学講話』を応用・引用しており、その辞格という概念の名称もこの二書のものを用いたのである」²¹と記述されたように、それは従来の「東洋派」「西洋派」「本土派」の偏りを乗り越え、「古今中外派」として、教育実践から出発しただけに中国の現代修辞学の目的・範囲・概念・分類・枠組を示したのである。実際、『修辞学発凡』は日本修辞学の強い影響を受けながら、その一方、いわゆる日本修辞学において切り開いた美辞学 — 美学・文学批評・作文・文字学

ないし古今文章を美学の下に論じるという広大な枠組と煩雑さを避けている。しかも、中国の口語化という「白話運動」のただなかにおいて、『修辞学発凡』はテキストとして使われ、現代中国語の形成とその基礎教育の現場において、修辞学という新しい分野から現代中国標準語に対して客観的な基準を与えたような役割を果たしたと言える。事実、『修辞学発凡』が出版して以来、中国現代修辞学にまつわる古今東西の論争はほぼ収まったという。

以来、中国の修辞学は、のちの文化大革命の時期を除き、ほとんど滞りなく発展してきたと言える。一九八三年まで大凡 160 冊の専門の著書が世に表われ²²、全体の特徴としては、修辞学を研究するだけに限らず、現代中国語の教育と標準化・規範化とつねに密接に展開してきた。とくに一九八三年以降、修辞学の授業を開講する大学が増え、二十二大学による修辞学教科書の共同編集²³も推進するようになる（この修辞学教科書の共同開発は世界修辞学の歴史上においても珍しいことである）。修辞学は現代中国語にとって文体の規範を示しただけではなく、言語学に関連する諸分野に連携され、メディア修辞学、コミュニケーション修辞学、認知修辞学などのように展開され、外国人に中国語を教える分野にも活用されている。

三、

一方、陳望道は中国現代修辞学の礎を築き、修辞学の教育実践に携わっただけでなく、彼はまたすぐれた翻訳者であり、のちには思想家、社会活動家、教育家と言語学者と称されるようになる。何よりもまず政治において、マルクス、エンゲルの『共産党宣言』の完全版を幸徳秋水と堺利彦の日本語訳から現代中国語に初めて翻訳したのは彼によるもの（1920年8月）²⁴で、その翻訳の修辭的な厳密さと明晰さは、直接、初期の中国共産党の組織の拡大と発展につながっていたという。中国共産党の発起人の李大釗（1889-1927）と陳独秀（1879-1942）は共に、陳望道の翻訳を応援した²⁵が、その翻訳文が魯迅に絶賛される。毛沢東も後にマルクス思想の信仰へ

の影響を与えた三冊の本の一冊が陳望道訳の『共産党宣言』だといひ、また鄧小平、陳毅ら多くの共産党の主要なリーダー達はその翻訳文を通じて『共産党宣言』を理解し、それに啓蒙されて中国共産党に入党した²⁶ という。とくに劉少奇は「私はまだ共産党に参加していなかったとき、入党について考えていたが、その『共産党宣言』を何回も何回も読んで、この本から共産党は何を目的にし、どういう党で、党のために人生を捧げる価値があるかどうか、深く考えた後、最後に共産党に参加し、そのために献身しようと思ったのだ」と当時の『共産党宣言』との出会いを回顧している。事実、陳望道の翻訳を除き、それまでの翻訳は断片的でかつ読みづらく、マルクス理論勉強会を組織していた李大釗や陳独秀も当時の翻訳文の文体に悩んでいた。

実際、陳望道の効果的な翻訳は当時の多くの読者に求められたと同時に、国民党側には出版禁止とされ、訳者が指名手配されるに至った。当時の封印を逃れるため『共産党宣言』は1920年8月初版から1938年の最後版まで、三回書名を改め、四回訳者名を変え、六回出版社を交替したことを強いられた²⁷ という。陳望道の抜群の言語の才能が中国現代修辞学の創出と運命を決定したが、その修辞学的な言語の才能は口語体の翻訳を通して中国の政治的な運命の行方の決定づけにも関わったと言える。

本来、修辞学は古代ギリシャの創出の時代から政治・権力と深く関わっていた。雄弁家のイソクラテス (B.C.436-338) からソクラテス (B.C.469-399) まで、あるいはアリストテレスが実際アレクサンダー大王 (B.C.356-323) に家庭教師として『修辞学』・弁論術を施し、『アレクサンダー大王宛修辞学』(著者がアリストテレスだと信じられてきたという説もあり)を書いたという、いずれも、修辞学は最初から政治・権力と密接に関わっていたことを物語っている。それと同じように、修辞学その本来の宿命的な姿は20世紀中国における陳望道の政治的な関わり方においても表象されたといえよう。いうなれば、修辞学は中国の政治的行方・運命を決定したと言え、しかも、忘れてはならないことは、中国現代修辞学は、古代ギリシャと同じように、その誕生のときから教育と啓蒙という実践と共に発展して

きたことであろう。これは修辞学が決して単に古代ギリシャのデモクラシーのなかで誕生し、デモクラシーのために奉仕してきたものではなく、あらゆる形の政治・権力ための役立つ道具だということの立証になろう。

四、

古典修辞学の伝統それ自体が欧米では十九世紀にわたって廃れ始めるが、日本では逆に十九世紀末から二十世紀初期に勃興した。しかし二十世紀二十年代に入って急速に衰微したのである。それに対して、修辞学は中国において最初は日本から受容し、三十年代から発展して、のち政治的・社会的な要因によって一時期停滞したものの、八〇年代以降に入ると、再勃興し、今や現代中国語の学校教育において重要な役割を果たしているだけでなく、とりわけ現代においては、新聞メディア、パブリック言説、行政的公文、外交のディスコースにおいて重要な役割を果たしている。

古代ギリシャ神話においてペイトー(Peitho; Πειθώ)「雄弁」・「説得」(英訳: persuasion)は雄弁の女神であり、説得・魅惑の化身だと信仰されていた。したがって雄弁・説得の才能のある人は、ペイトー・雄弁(persuasion)の女神に寵愛された人だと崇められていた。ソクラテスは雄弁家として修辞学を教え、雄弁術をもつ人とは自然に誠実、公正かつ善良な人だと信じていた。しかしソクラテスは修辞学の教育的、技術的な面を肯定しながらも、それに対して懐疑的で、修辞学はだれもが駆使できるのではなく、それは人々を惑わせる側面を持ち合わせ、その点において認識を真実に導くことはできないという。一方、自ずからまたホメロスと同じようにムーサに祈って神がかりの狂気のなか見事にエロスへの賛歌をささげ、雄弁のありかたを見せ示したのである。ソクラテスの弟子のアリストテレスは『修辞学』において弁論術を弁証法として転じて、都市国家アテネの自由市民にとって必要な基礎教養として教育に応用し、真理を捉えるための「守護神」(方法・技術)だったという。のち修辞学はローマのキケロ(B.C. 106-43)によって賞賛され、クインティリアヌス(A.D.35-100)の教育と

普及を通じて、中世において人間を無知から解放してくれる自由七学科の一科目となるにいたる。現在、修辞学は、欧米の諸現代の語学教育とトレーニングと融合されているといえる。

古代ギリシャから創出された修辞学は2400年も経ち、興亡盛衰をたどり、かつまた東漸して140年も経つ。世界全体が現在グローバル化の衝撃に見舞われているなか、中国において修辞学が重要視されている。それは現代中国語に組み込まれただけでなく、中国語教育に普及されつつあり、現に世界的に展開している「孔子学院」の現代中国語の普及を通じて、異民族との交渉に役に立つようにもなりつつある。とりわけ中国の外交において、欧米との弁論の場面で修辞学的な技法が駆使されたりすることは決して珍しくない。

したがって、今や東方において修辞学の創出の時を想起し、百年以上の辿ってきた歩みを振り返って、今まで問いかけてきた諸問題を改めて検討することが必要であろう。

つまり、修辞学はどんな人が、どんな伝統に、またどんな時代に、どういう状況において必要とされるのか？ それは一過性の教育装置化か、それとも常に教育を施さなければならぬ基礎教育科目なのか？ 言語が一旦現代化の洗礼を受け、現代社会において成熟したコミュニケーションの道具になったら、修辞学はまだ必要なのか？ 修辞学はコスモポリタンになるための必須とされる言語技法、あるいは教養なのか？ 修辞学はどういう状況においてナショナリズムに利用されるのか？ 真理の探究には修辞学という言語技術が必要なのか？

五、

現在、グローバル化の衝撃のなか、有無を言わず各国の言語、思考様式、表現形式、感受性ないし言葉の受容の仕方は、意識的、あるいは無意識的に変化を強いられている。しかし言葉と表現を中心に考えてきた欧米修辞学は、この変化に積極的に応答しているとはいえ、かつての

古代と中世の修辞学と比較してみれば、むしろ今は隠遁しているともいえる。

もちろん、修辞学はまったく衰微したのではなく、欧米の大学か研究機関での研究は依然として生きながらえており、国際的な学会として「国際修辞学史学会」(International Society for the History of Rhetoric)があり、2012年7月「21世紀におけるインターアクティブ修辞学」というテーマのもと、オクスフォード大学が20カ国の修辞学者をよんで、サミット式でシンポジウムを開いたり²⁸、修辞学専門、学科、コースはいまだに多くの大学に存続している。中世のような修辞学は欧米において表舞台から退いたとしても、それは基礎教育、作文や日常言語において生きており、言語やコミュニケーションの規範化には役立っている(演説か公的な発言をする人は、もし一定の修辞学的な教養、規則、能力がなかったら、パブリックではまず認められがたい)。言ってみれば、修辞学自体が問題として問いかけるよりは、むしろ2000年以上の伝統が静かに欧米の日常言語生活に染み込んでいると言える。

しかし、東洋においてそれは違う様相を見せている。とりわけ20世紀後半から21世紀に入って、修辞学は中国において大きな進展をなしてきた。言語学、教育学、中国語学、中国語教育学などの諸分野で修辞学が重視されるようになり、教育と実践を通じて独自の展開をみせている。そのなか特筆すべきことは、1980年中国修辞学史学会が創立され、2000年に入ってからさらに活発化し、2007年7月の「国際修辞学史学会」第16回年会(フランスのストラスブール市で開催)をきっかけに一つの転機を迎えた。つまり中国修辞学会代表がこの学会に招待され、会議中「国際修辞学史学会」の協力・参与のもと、「世界中国語修辞学会」(Chinese Rhetoric Society of the World)を創立する。翌年、2008年7月世界中国語修辞学会第一回年会が曲阜師範大学で開かれ、2010年7月第二回年会が香港教育大学で開かれ、2011年10月札幌大学で国際シンポジウムが開かれ、第三回年会は2012年10月韓国仁川大学で開かれて、次回の年会は米国オレゴン大学で開かれる予定である(学会年報『国際修辞学研究』(北京大学出版社)は英語・中国

語二ヶ国語によるもので、理事と顧問は、中国・韓国・アメリカ・カナダ・フランスなどの修辞学専門家によって運営されている)。

なお、仁川大学での会期中、中国代表がリードして「グローバル修辞学学会 (The Global Rhetoric Society)」という、日本と韓国を含め、欧米 13 か国の理事によって運営される史上発の全世界の修辞学学会が創立された。

これらの諸国際会議において、伝統的な修辞学、一般修辞学や中国語修辞学、韓国修辞学などの諸課題が取り上げられたほか、際だって特徴づけられたのは、修辞学が隣接分野に連携され、例えばコミュニケーション修辞学、メディア修辞学、認知修辞学、国家修辞学、比較修辞学など、今まであまり見聞きしない新しい分野の研究発表が多く盛り込まれたことである。

そういった中国修辞学の近年の展開について、アメリカの修辞学教授デヴィッド・フランク (元国際修辞学史学会会長) による要約をみた方が簡潔明瞭かもしれない。

デヴィッド・フランクは中国メディア修辞学代表格陳汝東 (北京大学教授) の諸論を踏まえ、欧米修辞学の視点からみて、21 世紀において中国修辞学は、欧米修辞学に対して六つの試金石を送り出したといい、それは東西修辞学の比較研究には値するという。その六つの試金石とは、つまり、現代中国修辞学の研究はその修辞学の起源を紀元前 5 世紀まで遡れるようにしているという事実①。欧米の修辞学と同じように、中国の修辞学も始終倫理・道徳についての議論がつきまとっているのが明らかにされていること②。また欧米修辞学と同じようにその倫理・道徳がつねに原則と規則に基づいていたこと③。しかもその修辞学は掟・文典・法典として成立されていたこと④。20 世紀、中国は日本と欧米の修辞学を受容してスタートしたが、今や拡張されて幅広い分野として展開されつつあること⑤。欧米修辞学と同じように、中国修辞学も現在、哲学・理論としての修辞学が必要とされていること⑥、という六つ面からまとめている。現在、欧米修辞学は、以上の六つの試金石によってチャレンジされており、フランクは、

比較修辞学の視点から以下の二点について念を押して、欧米修辞学と中国修辞学との接近を促す。つまり、その一つ目は、ローカル・地域の修辞学とグローバルな修辞学の相違・異同についての比較研究は、その最終目的があくまでも戦争より修辞学に基づいて国際コミュニケーションのため奉仕すべきであり、ローカル・地域の修辞学の伝統文化にとって代わるものではない。その二つ目は、東西比較研究を通じて、修辞学はコスモポリタリズムの言説を構築し、国際理解と平和、戦争対立の回避への貢献につながるべきだという²⁹。

また、中国修辞学代表の陳汝東教授（北京大学）は先述のオクスフォード大学で開かれた2012年7月「21世紀におけるインターアクティブ修辞学」において、欧米修辞学重鎮のサー・ブリアン・ビッケルスとの東西修辞学のディスカッションを行なったが、そこで中国は世界修辞学に参与し、武力と戦争の代わりに修辞学的コミュニケーションを求めたいといい、したがって欧米は古典修辞学から歩みだし、アジアの修辞学に目を向けるべきだと呼びかけたところ、参加者に賛同を得たという³⁰（実際、具体的に、修辞学教育において、2012年中国史上初の「修辞学・コミュニケーション学」博士専攻が北京航空航天大学でスタートし、中・米両国の教授によって共同で指導が進められている）。

以上のように中国の修辞学研究が国際的に展開されるようになったが、そのなか最大の進展といえば（私見によれば）、恐らく東西において修辞学には本質的な相違が存在するということが明らかにされたことであろう。つまり、修辞学には「公共的修辞」と「私的修辞」という二種類があって、欧米の修辞学は起源から「公共的修辞」の性格をもつことに対して、東方の修辞的な実践は、最初から「私的修辞」の性格をもっていたことを明らかにしたことであろう（初めて「私的修辞」を指摘し、概念として定義したのは陳汝東）。陳によれば、この「公共的修辞」と「私的修辞」は、「それぞれ二つの修辞的現象で、二つの文化伝統、形態である。それは二つの組織の方式で、それぞれの形でコミュニケーションし、それぞれの社会はそれぞれの秩序とモデルをもち、それぞれの社会権力と社会制度の反映である。

……古代ギリシャの公共的演説の修辞学は公共デモクラシーに基づいて公共的事業の決定の秩序が作られ、比較的公平・公正なコミュニケーションのシステムを形成してきたが、……中国の古代及び現代修辞学的な実践は、中国の社会的コミュニケーションと発展システムを選択したことを反映している」³¹ という。

この「私的修辞」という概念は、確かに中国にも古来修辞学が存在し、その性格が定義されたが、それは同時に、中国の伝統的な修辞学はあくまでも私的、個人に集約されたもので、非パブリック的な欠陥をもつという、その限界と劣性を露呈し、指摘したことでもある。したがって、中国において「公共的修辞」が必要とされ、氏のいうには「グローバル時代に、新しいメディア環境のもと、中国の民主制がさらに進み、公共的権力の構築、公共的政策の決定、公共的事業の処理などにおいて、公共的意思表示と意思集中がますます重視されるようになっていく」。また「インターネットなどの新しいメディア環境のもと、中国の公共的修辞の研究と、新しい公共的修辞の秩序の構築と、公共的修辞学的な発展は、中国修辞学発展の新しい空間と方向である」³² と、中国修辞学の今後の発展の方向性を示している。

こういった中国修辞学の国際的な展開に対して、比較文学、比較修辞学的な視点から、以下の二点について問いかけ、改めて東方にとって修辞学とは何を意味しているかを考えたい。

その一つ目は、もし東洋において「公共的修辞」という概念が受容され、グローバル化のなか普遍的価値としての「公共的修辞」において共通の認識を得ることになれば、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』や、ジョン・トムリンソンの『文化帝国主義』などにおいて提唱した諸命題にどのように応答すべきか。つまり西学東漸が進み、かつての文化的帝国主義、あるいは現代のグローバリゼーションによって、非欧米地域、ネイティブの伝統的な価値体系が塗り替えられ、刷りかえられることに警戒すべきだというような諸問題にどのように応答すべきかである。いわば伝統的な修辞的価値 — 「私的修辞」をどのように扱うべきか、あるいは中国はすで

に偏狭な自己愛・ナショナリズム、あるいは素朴なオリエント自己愛を乗り越える心理的な用意ができたのであろうか。あるいはサイドらの問いかけはまだ東方にとって有益かどうか、それらを改めて考えるべきことであらう。弁論・弁証・思弁の伝統がなかったネイティヴにとって、一定の原理のため、いかように「公共的修辞」を施すかが問われるのである。

その二つ目は、西欧の「公共的修辞」を受容し、その普遍的な価値を認めるならば、どのようにその体系としての根源にある命題まで受容し、のみこんで解釈するのであろうか。その命題とは、ソクラテスがパイドロスとの対話において示した(プラトン『パイドロス』237A-253C)——修辞学自体はどのように真理、真実を極めるか、あるいは真理、真実を極めるのに、どのように修辞学を扱うのかという命題である。言い換えれば、ソクラテスによって呈示された命題——修辞学と霊的・神がかり・インスピレーション・狂気との関係は、一体どのように看做すべきかという、西欧修辞学それ自体の存続にかかわる命題である。というのも、西欧修辞学はその誕生のときから、『パイドロス』で示されたように、他の分野に隷属された道具、形式として扱われて、その価値が下げられ、単なる術として扱われることもあれば、そうではなく、ソクラテス自身が演説を通じて、人間自体の超越的な能力によって修辞学それ自体が真実と真理を探究するそのものであると示したように、それは両面性を兼ねて営んできたジャンルである。したがって、修辞学とは、一種の道具か、それとも真実・真理を探究する分野なのか、つねに相反する命題を抱えてきた分野である。しかしその一方、ソクラテスの時代から修辞学はその基礎教育と日常生活における道具としての役割を軽視したことはなく、むしろ対話、弁論を通じて、弁証法との融合によって一学科としてその伝統を営んできたと言える。したがって、もし東方においても一自律した知的な営みとしての修辞学が確立されようとするれば、それらの命題の受容と解釈が避けられないであろう。さもなければ修辞学はいかなる政治体制にも利用できるような道具として成り下がりがかねない。

註

- 1 日本の「言文一致」(1887) に対して中国は「文学革命」(1917) であった。
- 2 Chamberlain, Basil Hall. *A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style)* Trubner, London. 1886.
- 3 Chamberlain, Basil Hall. *A Handbook of Colloquial Japanese*. Trubner, London. 1888.
- 4 William Chambers, 1800-1883. Robert Chambers, 1802-1871.
- 5 W. & R. Chamber, *Information for the People*. 5th Editon. 1874-1875.
- 6 速水博司『近代日本修辞学史』有朋堂, 1988年(59頁)。
- 7 高田早苗『美辞学』金港堂, 1889年(1頁)。
- 8 坪内逍遙「美辞論稿」『早稲田文学』, 1893年。
- 9 武島又次郎『修辞学』博文館, 1898年(3頁)。
- 10 坪内逍遙講述, 白髭武三次筆記『修辞学』(早稲田大学古典総合データベース)。
- 11 原子朗『修辞学の史的研究』早稲田大学出版部, 1994年(62頁)。
- 12 五十嵐力『新文章講話』早稲田大学出版会, 1909年(5頁)。
- 13 同上(39頁)。
- 14 呉禮権『中国現代修辞学通論』台湾商務印書館, 一九九八(42頁)。
- 15 Nesfield, John Collinson. *Senior Course of English Composition*. London: Macmillan. 1898.
- 16 Clark, John Scott. *A Practical Rhetoric for Instruction in English Composition in Colleges and Intermediate Schools*. New York: Henry Hold. 1886.
- 17 Genung, John Franklin. *The Working Principles of Rhetoric*. Boston: Athenaeum press. 1901.
- 18 鄭子瑜『中国修辞学史稿』上海教育出版社, 一九八四年(494-495)。
- 19 <http://www.shu.edu.cn/Default.aspx?tabid=10589>
(この「上海大学」は現在の「上海大学」(1994創立)とは違い, かつて1922年創立され, 1927年閉鎖された)。
- 20 <http://baike.baidu.com/view/54499.htm>
- 21 鄭子瑜『中国修辞学史稿』上海教育出版社, 一九八四年(495)。
- 22 呉禮権『中国現代修辞学通論』台湾商務印書館, 一九九八(2-4頁)。
- 23 宋振華ほか編『現代漢語修辞学』吉林人民出版社, 一九八四年(全国22大

- 学教材共同編集)。
- 24 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店, 二〇〇一年 (59-62頁)。
- 25 中国共産党新聞網
(<http://cpc.people.com.cn/BIG5/68742/84762/84763/6900448.html>)。
- 26 同上ネット
(<http://cpc.people.com.cn/BIG5/68742/84762/84763/6900448.html>)。
- 27 同上ネット
(<http://cpc.people.com.cn/BIG5/68742/84762/84763/6900448.html>)。
- 28 “Rhetoric in the Twenty-First Century” At the Centre for Medieval & Renaissance Studies, Oxford University (July 3-7, 2012).
- 29 David A. Frank “The Problem of Rhetoric and the Rhetoric of Problems: Developing a Global Rhetoric” 『国際修辞学研究』(第二号, 世界中国語修辞学会) 高等教育出版社, 2012年10月 (p.13-16)。
- 30 David A. Frank “Three Contributions Made by the Chinese Rhetoric Society of the World”. *International Rhetoric Studies at the Time of Global-cultural Amalgamation and Conflict: East Asia and World*. The Third Biennial Conference of the Chinese Rhetoric Society of the World & International. Conference on Rhetoric (p.2). In Incheon University, Korean. October 26-28, 2012.
- 31 陳汝東「論公共修辞学の理論建設」『国際修辞学研究』(第2号, 世界中国語修辞学会) 高等教育出版社, 2012年10月 (p.5)。
- 32 同上, (p.10)。